

漢方薬という、エキ  
ス顆粒か、錠剤・カプセ  
ルのものを思い起こされ  
る方が多かろう。しか  
し、従来の漢方薬にはい  
ろいろな剤形がある。

一番多いのは、葛根湯  
などのように「湯」が付  
く薬である。「湯」は中  
国語では「スープ」の意  
味である。つまり、煎じ  
薬である。中国から来ら  
れた方が「錢湯」の看板  
を見て「どんなスープ屋  
さんなのだろう」と思っ  
たという笑い話もある。

漢方薬イコール煎じ薬  
と思われるかもしれない  
が、そうではない。漢方  
薬には当帰芍薬散のよう  
に「散」の付くものもあ  
れば、八味地黄丸のよう  
に「丸」が付くものもあ  
る。また、これらはどう  
違うのであろうか。

まず、「散」は生薬を  
薬研などで粉にしたもの

である。代表的なのは当  
帰芍薬散や五苓散であ  
る。煎じ薬と違い、携帯  
・服用が便利で即効性が  
ある。

八味地黄丸などの丸剤  
は、散と同様に生薬を細  
かく砕いて細末にして、  
適量の蜜などを加えて丸  
めたものである。服用、  
携帯、貯蔵に便利で効果  
の持続性がよく、正確な

分量を得る

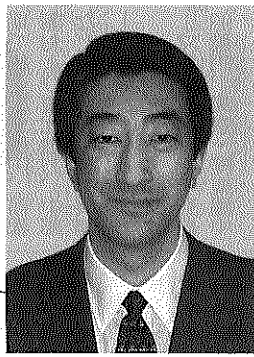
ことが容易

という利点  
がある。

しかし現代では、当帰  
芍薬散や桂枝茯苓丸とい  
った従来は散剤や丸剤の  
ものも煎じることが多  
い。この場合には「当帰  
芍薬散料」や「八味地黄  
丸料」(こうちゅうに「料」  
を付ける。従来の剤形と

## 漢方シリーズ ⑨

# 漢方薬の剤形



慶應大学医学部助教授

## 渡 辺 賢 治

で飲むことになってい  
る。奥様から禁酒を強い  
られていた患者さんに八  
味地黄丸はお酒で飲むの  
が良い、ということにつ  
りされるのだが、通常お  
猪口一杯の日本酒をコッ  
プ半分ほどの適温の湯で  
割って飲んでもらう。決  
して過量に飲む必要はな  
いのである。

そのほか、外用薬もあ  
る。紫雲膏は華南青洲が  
中国の明代の潤肌膏とい  
う薬をもとにして創った  
もので、当帰、紫根など  
を原料としている。ま  
た、蜜煎導は蜜を固めて  
肛門に入れ、便通をつけ  
るものである。そのほか  
薫蒸するものや、鼻孔に  
吹き入れるものなど、用  
途に応じて様々な工夫が  
なされている。

さらに煎じ方も、薬に  
よって用いる水や煮詰め  
る量が異なる。小柴胡湯  
などは「再煎」といつて、  
一度煮出した生薬を取り  
除いて再び煎じるように  
指示がしてある。  
また薬の服み方にも、  
実に細かい指示がある。  
桂枝湯は服用した後、熱  
いお粥を食べ、布団をか  
ぶって、しっかりと汗を  
かき、食べるもの注意  
までしてある。薬を飲む  
時間も汗をうっすらかく  
まで間隔を縮めて飲むの  
である。  
このように、その薬が  
一番効きやすいような剤  
形や服用法の細かい指示  
があるのが、本来の漢方  
の使い方である。現代で  
は複雑な指示を避け、一  
律な方法で煎じをしてい  
ることが多いが、本来の  
服薬方法には必ずその意  
味があるはずである。そ  
の理由が科学的に解明さ  
れる日がいずれ来ること  
であろう。